

第10回「泉大津市オリウム随筆賞」

【優秀賞】

お父さんのチョッキ

池永 恵子・和歌山県橋本市

「本当の父親でもなくせに、偉そうなと言わんといて！」

言葉の毒矢を放ったと同時に、しまった！ と、すぐに後悔した。決して、言ってはならないことを、私は口走ってしまった……。

「こんな夜遅くまで出歩いてたらアカン」

さつきまで身をのりだして説教をしていた父の顔が、目の前で、みるみる毒に侵されてゆく。私の心は、暗い夜の海に深く沈む。

ごめんなさい。

それが言えない十六才の夏だった。

父と私に、血のつながりはない。

私が生まれる半月前に交通事故に遭った実の父は、三十才という若さで亡くなった。そんな事情のもと、父として彼が現れたのは、私が小学校五年生の時だった。

広い肩。整髪料の清涼な香り。野太い声。

差し出された彼の手は、モノクロ写真の中の父しか知らなかった私にとって、あまりにも大きすぎた。昔から、父親と手をつなぐ友達を見ると、羨ましくてたまらなかった。なのに、私達は本当の親子じゃない、という、わだかまりが邪魔をする。最初に取り損ねた大きな手は、思春期を過ぎても握る勇気がなく、ギクシヤクしたまま宙に浮いていた。

二十歳を過ぎた頃、結婚が決まり、彼の家へ父と母、私の三人で挨拶に行った。通された客間には、掛け軸や生け花が飾られていて、ふかふかの座布団に、お尻は落ち着かなかった。頼りの彼が、何だか遠くに感じ、心細い。

事前に話は整っていたので、その場は和やかに進み、そろそろお暇しようとした時の事。敷いていた座布団を、父がおもむろに外した。

「末永く、娘をよろしく願います」

そう言うと、畳に額をつけて、彼の両親に深々と頭を下げたのだ。予想だにしていなかったその所作に驚いた私は、ただ父の背中を見つめるしかできなかった。普段はガツチリと見えていたその背中が、小さく畏まっている。母と二人並び頭を下げる父の姿は、まるで自分を盾にして、目に見えない何かから、私を必死に守ろうとしているようだった。

* *

「お父さんにベスト編みたいから教えて」

彼の家で見た父の真心に、私は心を打たれ、今までのわだかまりが、嘘のように消え去

った。今までの感謝の気持ちを父に伝えたい、と手編みの物を贈ることを思い立ったのだ。編み物上手な母に相談すると、相好を崩し、毛糸選びから付き合ってくれた。父に合う物、と二人、おでこをくつつけるようにして選んだ色は、ワインレッド。

不器用な私は、徹夜もしながら何とか、式の前日に用意することができた。

「あの、お父さん、これ」

頬を染めた私から、ラッピングされた物を受け取った父は、目を丸くした。咳払いを一つして、「ん？」と言つてリボンを解く。

「あつ、チョッキ。えんじ色。ええ色や」

私は母と顔を見合わせた。「ベストとワインレッド」が、「チョッキとえんじ色」になったことに、私達はそつと、笑いをこらえる。

父は破顔して、「ありがとう」と言う、母に勧められるまま、頭からかぶるようにして身につけた。すると、拙い私の編み方の為、父の出っ張ったお腹の部分だけが、にゆう、と編み目が広がった。その瞬間、我慢していた笑いが溢れ出た。それにつられた父の野太い笑い声も入り、三人の笑い声が重なった。

笑いが落ち着くと、私は居住まいを正した。

「お父さん。今までありがとうございました」

食卓を挟んで、父に深々と頭を下げる。

「幸せになるんやで。応援してるからな」

鼻の奥がつん、と痛くなった。

翌日。結婚式は晴天に恵まれた。

いよいよ今から、タキシード姿の父とバージンロードを歩く。腕と腕を組む前に、私は、とつさに父の手を握った。父は一瞬、目を見張ったが、すぐに「うん」と頷いて、強く握り返してくれた。やつと、父の手を掴めた。その手は、ゴツゴツして、少し汗ばんでいる。「お父さん、高校生の時、ひどいこと言つて、ごめんなさい」

ずつと言いたかった言葉が、涙と混じる。

父は目頭を押さえていた。

* *

月日は流れ、仕事と育児に忙しくしていた私に「お父さん、入院することになったんや」と、母から連絡があり、急いで病室に駆けつけた。痩せた父はベッドの上で、あのえんじ色のチョッキをゆったり、と着て待っていた。

「それ、まだ着てくれてるんや」

ベッド脇の丸椅子に座り、切なさを隠す。

「当たり前や。これは、あつち行つても着るからな。お棺に絶対入れてくれよ」

目尻を下げて言う父の膝に、私は「そんなこと言わん」と、思わず突っ伏した。嗚咽する私の頭を撫でる父の手は、どこまでも温かかった……。